

# 御土はんのう

第25号



- ◆ “新飯能市”からの展望(坂口和子)・・・2
- ◆ 大河原亀文「春(す)いもの草」  
一道中記を中心として一。(中里和夫)2～3
- ◆ 名栗のあゆみ  
飯能市名栗村編さん委員(島田稔)・・・4～5
- ◆ 帝王切開の地・飯能(高橋通)・・・6

- ◆ 随筆 草もち (大野悦子)・・・7
- ◆ 随筆 私の家の橋 (浅見初枝)
- ◆ Q子ちゃんとAおじさんの飯能歴史・・・7～8  
おもしろ問答(その6)。(吉田靖)・・・2～7
- ◆ 飯能郷土史研究会の活動・・・8



“新飯能市”からの展望

坂口和子

平成十七年一月一日、飯能市と名栗村との合併により新しい飯能市がスタートしました。

それにもないわが郷土史研究会も新しい局面をむかえ、活性化への飛躍台に立ったことを感じます。

今までお隣りの村として親しみ、意識していたのですが、これからは同じ市民として共有するものが増えました。

うのんは土郷

もともと郷土の歴史というものは行政上の厳密な境界線があてはまるものではなく、地続きの相関関係で成り立っているものと考えられます。往古から名栗村と飯能を結ぶ街道できていたからこそ、経済も文化もお互いに影響しあって今日まで続いてきたわけです。

新飯能市の地図を見てもみましょう。境界線のない地図を眺めていると、埼玉県では二番目に広い行政区域だと言うことが納得できます。そしてそこには穏やかな山々がつらなり、杉、檜の緑深い森林がつづくなかを清冽な川が蛇行し、美しい自然の環境を作っていることがよくわかります。日本の原風景ともいうような懐かしい山村の姿です。風土は郷土の歴史の原点でもあります。私たちの視景が広くなれば、

自ずと視野も広がります。知識を深め、経験を生かしながら、未知なるしへの探訪を心がけたいではありませんか。名栗村の風土、文化財、民俗行事などへの関心を高めるための学習会も必要でしょうし、見学会なども定例会にもりこみみたいと願っています。そして多面的に飯能との接点を探してみたいと思います。その上名栗の方々に、飯能市の郷土史も知って頂くための努力をしていきたいものと思っております。飯能郷土史研究会の新しい年になりますよう皆さまのご協力をお願いいたします。

大河原亀文「春(す)いもの草」

—道中記を中心として—

中里和夫

一、作者大河原亀文について

作者大河原亀文は江戸時代後期に活躍した飯能村在住の国学者である。飯能村の名家の生まれ(安政二年、一七七三〜天保二年、一八三一年)で、今でも飯能大通り商店街にある「亀屋薬局」の名からとったものではないかといわれており、当時はこの経営者でもあった。幅広い知識を有し、専ら著作活動の拠点を飯能におき、江戸内外に広い交友関係をもち、反骨精神旺盛な批評を交えながら、広範囲な著作活動を展開していたようである。

この作品の形式は道中記であるが

随所に故事来歴、川柳、狂歌、漢詩をちりばめ、高度な内容の作品になっている。

本稿専ら地理、道中のトピックスに重点をおかせていただくことにし、ご関心のある方は平成十六年二月十八日開催の飯能郷土史研究会例会時に配布された翻刻文と浅見徳男先生の解説を合わせ参照吟味していただければと思っております。

二、すいもの草道中略画(田島保記)

●飯能(出発文政四・三・十七)↓箱根ヶ崎↓八王子(飛し屋)↓杉山峠(現御殿峠)↓橋本↓溝↓座間(星谷寺)↓厚木↓飯山(飯山観音)↓日向(日向薬師)↓九十九曲峠↓大山(阿夫利神社・不動尊)↓曲松↓四十八瀬渡し↓川音川菖蒲↓松田十文字渡し↓酒匂川流域↓関本(茶屋)↓最乗(最乗寺)↓塚原↓飯泉(飯泉観音)↓小田原↓大磯↓藤沢↓江ノ島↓鎌倉(長谷大仏、鶴岡八幡)↓金沢↓神奈川↓川崎↓大師河原(川崎大師)↓六郷渡し(多摩川)↓鮫洲↓日本橋↓深川(江戸見物)↓府中↓飯能(帰郷文政四・四・四)

三、トピックス

①箱根が崎にて

道中の一行は作者、その妻、下男、彼女計四名であるが、彼女は文中で見える限り正体不明である。箱根が崎の閑屋という茶屋で一行が昼食をとっていたくんだり、そこに勤めていたことが推察されるが、それ以上は

Q 子ちゃんとおじさんの飯能の歴史おもしろ問答

(その6)

吉田 靖

時代的移り変わり

▽Q 子ちゃん：前に聞いた話だけど、A おじさんは新聞記者だったころ面白い氏名の人を紹介する記事を書いてたそうね。どんな変わった名前に出会ったのかしら。

▼A おじさん：飯能や日高に住んでおられる珍名奇姓さんを訪ね歩いたんだが、なかなか面白い氏名の人がいるもんだと関心したものだ。これらの氏名は『私の名は』(戦後のベストセラー小説でもヒットした『君の名は』をもじって)のタイトルで連載したんだが、そのうちの幾人かを拾いだしてみよう。まず名字では①薬袋②浮孔③最首④弓削田⑤櫛笥⑥道祖土⑦生天目⑧取達⑨四十崎⑩五百部といった人がいた。どうか、Q 子ちゃん読めるかな？

▽：ふーうん。なるほど奇姓ね。最首とか、取り違えなどギョッとするようなものまであるのね。わたし、読めないな？

▼：無理もないよ。だから面白いのだからね。正規の読み方は①みない②うけな③さいしゅ④ゆげた⑤くしげ⑥さいいど⑦なまため⑧とりちがえ⑨あいざき⑩いよべ、となる。

▽：辞書にもないのがあるのね。そして次が珍名さん。

(3ページ下段へ)

## 郷土はんのう

読者の推量におまかせするしかない。いずれにしても、当時のお大尺旅行の類であろうか。

## ②日向薬師にて

作者の妻が作者の作品に苦言を呈し、作者がこれを苦々しく思っていることが描かれているが、今とあまり変わらぬ夫婦関係ではほえましくもある。ちなみにこの道中記の冒頭で「妻にせがまれ」旅に出るといふ表現があり、妻の家庭における立場も察せられる。

## ③浄発願寺にて

開祖彈誓上人の生い立ちが描かれているが、筆者ならずとも、思い浮かべるのは新約聖書の処女懐胎のくだりではなからうか。私見だが、平安時代の説話集今昔物語にインド、中国のそれらが収められているが、新約聖書時代の物語の類が今昔物語に代表されるような説話とともに遠くシルクロードを経由して、日本に伝承され、それが時代の変遷とともに、日本の物語として、土着したのではなからうか。

## ④大山寺の門前にて

門前の力たんす(カダンゴ?)の売り子が上げ底まがいのその串刺しを連れの女性達に売りつけ、なおまたそれを群がる犬にも分けてやれとけしかけ、それに乗って女性たちが喜んで投げ与える様は今と変わらぬ観光地の風景である。

## ⑤最乗寺の参詣

最乗寺を参詣した後、現在の明神ヶ岳を越し、木賀温泉に向かうところで、今でいう突風で強い風雨に出会い、あわや遭難という事態になったが、幸い土地の石川と言う樵夫に助けられた。このルートは今でも健脚向きのもので、当時としては女性連れはかなりの強行軍であったではなからうか。

余談になるが、かねてから石川氏の子孫を特定しようと試み、在所の南足柄市塚原の住民に知己をえ、照会したことがあるが、石川姓は当地に数多くあり、この資料だけでは困難と回答されたことがある。

## ⑥小田原、藤沢、江の島鎌倉にて

作者はいずれの宿泊でも旅宿のサービスの悪さ、客の態度の悪さを訴えている。作者の田舎風のお大尺のぜいたく、あるいは天下の東海道宿の繁昌のなせる業か。総じてこの道中記を通じて作者の批判、観察の鋭さが随所にみられるが、その余り感情過多におちいり、加えて田舎者のコンプレックスの裏返しと解されかねないところがある。

## 四、当時の旅

この作品が書かれた化政期は文化の大衆化といわれている。すなわち徳川の平和を背景に成熟化した社会の中で一部の特殊階級から一般大衆へ文化の主体が広まっていった時代である。旅もその例外ではなく、近郊の一、二泊程度の旅から講の主催する京都、江戸見物、伊勢参宮など

の遠距離旅行まで一般大衆が参加していた。本稿の大山詣はは講として飯能地域にあつたといわれている。しかし本稿のような女性連れの、文人趣味を遺憾なく發揮した相模中心の都合十七日間の単独旅行はやはりぜいたくな部類に属するだろう。最近地方のこの時代の古文書をひもといてみると、意外に行動の自由を制約されない、社会的にも、文化的にも活発な活動を続けた庶民に目にかかる。

▼:これも難解というか、微笑ましいというか、面白い人がいる。笑照(えとし)鶴亀雄(きつお)竿(しげ)福止(ふくし)怒元(よしもと)真砂永(まさえ)袈裟未(けさみ)記念(のりつね)といった人達がいた。姓名ともに変わっていたのは、行木七五三(なめき・しめ)斑目愚智男(まだらめみちお)照喜納良全(てるきなり)ようぜ(ん)小高竹雄(おだかたけお)といった人だ。

▽:やっぱり珍名さん揃いね。ただ最後の小高竹雄さんというのはちよつとも珍名奇名じゃないけど。

▼:そう、これが男だったらどこにもある名だろうね。ただこの人女性なんだ。女でこうした名はめつたにないと思うよ。

▽:そう女性だったの。するとこれは大いなる珍名さんといえるかもしれないわね。珍名奇名さん、いずれもいろいろな事情とか、曰く因縁があるんでしようが、そんな話も聞きたいわ。

▼:面白いエピソードもあるんだけど今回氏名の移り変わりがテーマなので、奇姓珍名エピソードは後のお楽しみとして、本題に入ろうね。

▽:そうだったわね。いったい人に名前を付けられるようになったのは、いつ頃の時代からなの。

▼:それは当然のことながら日本に文字が生まれてからだだった。文字がなければ名を付けようがないからね。



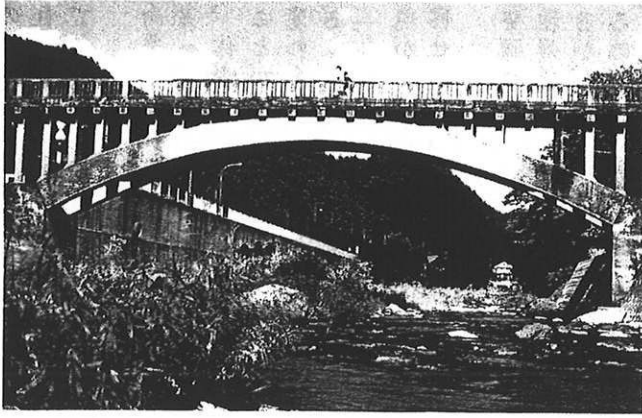


## 名栗のあゆみ

島田 稔

はじめに

平成十七年一月一日、旧名栗村は飯能市と合併した。合併は行政的には一つの新しいことになることであるが、市の活性化に向かうには飯能市八地区が歴史と特性を見直して競い合うことが必要と思う。長所を出し合うには、地区に対する理解と協力も大切である。以下、名栗の歩みの節目と文化的領域を取り上げ、特性を拾い出してみたい。



## 一、歩みの断片

## (1) 武州一揆

慶応二(一八六六)年六月、名栗村を発生地とする「武州世直し一揆」が起り、武蔵国、上野国にまで拡大した。この一揆は、幕末最大の規模であり、幕藩体制に大きな影響を与えたと言われている。

上名栗・正覚寺檀徒を中心とした一揆勢は村役人の制止を振り切って飯能河原に終結、近隣一揆勢と共に穀物商を打ちこわした。この時の主な要求は、米の値下げ、施金、施米等であった。

慶応二年は天候不順で長雨となり、豊作は望めなかった。加えて、安政の開港以来、米価の異常な高騰が続いた。名栗は田が無く、米の自給は出来ない。林業で得た現金で飯能から米等の生活用品を購入していた村民は米価高騰の影響を大きく受け、立ち上がった。林業を中心とする生業の特性は、この面にも見ることが出来る。

## (2) 村の成立

明治二十一(一八八八)年四月、明治政府は町村合併をはかるため「町村制」を公布した。県は準備期間を終えた翌二十二年四月一日これを施行、この時、名栗村は上名栗村(戸数二七七)、下名栗村(戸数一四三)が合併して誕生した。

初代村長には町田菊次郎(上名栗九区、新館)に「たち」が当選、就任した。しかし、就任期間が八ヵ月と極端に短い。このことは、二代(5ヵ月)、三代(九ヵ月)にもいえる。

理由は定かではないが、合併後の村運営に係わる心労が考えられる。初代町田家資料には「村長当選二件事由上申辞職願」があり、二代村長、下名栗、小沢家にも身体的事由による辞退願がある。

合併後に村の調整を必要とする事項には、江戸時代から続く「新組・古組」、「区有林(旧入会地)」等、名栗特有のものがあつた。

「新組」「古組」は上名栗村で分離した二組の組名で、新組は年番名主、古組は町田家の代々名主という二つの方法で村政が運営されていた。

また、組に所属する家は村内で複雑に入り交じり、地区で分ける事はできなかった。合併前の「区有林」は上・下大字の財産となり、村には財産が無かった。村内には上・下名栗の区別があり、財産の管理、予算執行は、区会議員が行っていた。したがって、村長、村会議員は大字の調整役の立場であつた。

三代、岡部勇蔵はこれ等の調整の上に、役場として借用していた民家の火災で行政文書をすべて焼失するという被害に遭い、職を辞している。この頃の村長、助役は村会で選ぶ名譽職であつたが、人を得て安定するまでには、4代、浅見武平(在任二十八年)を待つしかなかった。

## (3) 郡域変更

大正時代まで、名栗、吾野は秩父郡だつた。これも地域の特性である。たしかに、古くは秩父盆地からの文化の流入があつたが、筏の流送が始まり、川筋を通して江戸と直結する

## (3ページより)

▽: 日本に日本語の文字が出来たのはいつごろだったのかしら。

▼: 国内に資料が残っていないのだからとはハッキリ言えないんだが、多くの学者は今から千五百年くらい前だろうと見ている。文字の無い未開時代にも人には呼び名があつたのだろうが、それは音声記号みたいなもので、文字にはなっていないか、と想像される。

▽: そうした古代に日本文字がどうして作られたのかしら。

▼: 5世紀ごろ、大和(やまと)朝廷が学僧や学徒たちを遣唐使として中国へ数多く派遣し勉強させたんだが、そうした知識人たちが漢字(中国文字)を持ち帰り貴族たちに伝え、広まっていったんだ。しかし漢文というのはどうも難解難読だとして学者たちが研究、片仮名や、平仮名を編み出し、これを日本文字として定着させていったんだよ。

▽: 仮名文字を作り出した頭のいい、その人は誰だったの。

▼: 現代のいろいろな学者たちがその人物を割り出そうと研究してきたんだが、おじさんの知るかぎり今のところ人物は特定されていない。おそらく学者たちの共同研究によって作りだされたものだと思うよ。日本独自の仮名文字といっても全くの白紙から創造したものではなく漢字の一部、たとえば三水(さんずい)を取ってシの字を、ウ冠を取ってウヤワを作ったんだ。「片仮名」という

(5ページ下段へ)

## 郷土はんのう

時代に入ると飯能を初めとする下流域との交流は重要なものとなり、入間郡への郡域変更の願いは高まっていく、郡域変更の要望は郡役所設置の明治十二年以前から行われているが、郡役所が出来ると上名栗村外七村から秩父郡長宛に「郡替願之儀二付上申」が出された。変更理由には、川越、東京との盛んな通商、秩父に向かう峠道の難渋、荷車通行の利便比較、往古「高麗郡」だった歴史的事項等を述べている。上申は直ちに取上げられることもなく置かれたが、変更要望は以後さらに高まり、国会議員の協力、地域の組織的な運動等により大正十年七月に名栗村、吾野村の入間郡編入が認められた。

## 二、あゆみを残す

(一)文化財  
文化財を先人の残した文化遺産ととらえると、名栗谷に住んだ人の痕跡を示す石器、土器。一三〇八年建立を最古とする板碑や鎌倉時代の仏像がある。近世、近代に入ると五万点にのぼる日本でも有数の地方文書、「町田家文書」(上名栗九区・学習院大学資料館蔵)。名栗村史編さん室で調査、整理した二万五千点の文書史料等があり、村史編さん史料となっている。

## 〔県指定〕

有形・無形文化財として指定されているものは次のものである。

- 下名栗の獅子舞
- 名栗川橋(下名栗四区舟木)

(下名栗)諏訪神社  
○木造来迎阿弥陀如来立像  
(上名栗七区宮の平)

〔旧名栗村指定〕

○星宮・諏訪神社の獅子舞

○檜淵諏訪神社の獅子舞  
(上名栗八区)

○木造虚空蔵菩薩坐像(下名栗小沢)  
(上名栗人見)

○木造十一面観音立像  
(上名栗十一区柏林寺)

○木造千手観音立像  
(湯の沢松木観音堂)

○木造阿弥陀如来坐像  
(上名栗十一区櫃沢)

○旧名栗村森林組合文書



(柏林寺木造十一面観音)

## (2)「名栗の歴史・民俗」

編さん事業

「旧名栗村政施行百周年記念事業」で構想が練られ、以後、教育委員会内「名栗村史資料調査委員会」により、史料の収集整理、研究、保存、公開の仕事が一〇年にわたり実施された。

平成一五年、調査委員会は編さん委員会に組織替えを行い、平成十六年に「名栗の民俗(上)」を刊行することを目指した。

合併後は、この事業も飯能市郷土館に移行され、「名栗の歴史(古代・中世・近世)」「名栗の歴史(近代・現代)」「名栗の民俗(下)」の刊行に向けて作業が進んでいる。

現在までに、史料を研究して公開する作業として次のような名栗村史研究誌が刊行されている。

○「名栗村史研究1・那栗郡」  
武州一揆新史料「変事出来二付心得覚記」

○「名栗村史研究2・那栗郡」  
安政六(一八五九)年から大正期にかけての記録「古今稀成年代期」

○「名栗村史研究3・那栗郡」  
小学校の歴史を記録した「学校改革誌・名栗東小学校」

○「名栗村史研究4・那栗郡」  
明治期に、進取の精神で村づくりの中心となった青壮年団体「甲南智徳会関係史料」

おわりに

合併の年ということで、名栗地域の紹介欄を設定していただきました。内容が断片的で理解しにくい点多々あることと思いますが、ぜひ、会員の方々の足と目で地域を見ていただければ幸いです。このような機会を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。

(飯能市名栗村史編さん委員)

旧名栗村の市民の皆さん  
飯能郷土史研究会への入会をお待ちしています。

## (4ページより)

漢字の一部(片方)を(仮・か)りた名(文字)という意味なんだよ。むろん平仮名もおなじように漢字のくずし文字から作られたんだ。

▽:すると漢字が元になって日本文字が出来上がったのね。そこまでは分かったけど、さてそこで漢字と人名の関係はどうなっているのかしら。

▼:全国を平定しつつあった大和朝廷は、支配体制を確実なものにするため、地名を決定させた。先ず全国を七十二カ国に分け、国名を決めさせた。これが武蔵国とか上総国、甲斐国といった地名になり、さらに武州、上州、甲州と呼ばれるようになった。国(州)では広過ぎるのでその下に郡(こおり)、その下に郷を、さらに庄、村というように細部にわたる地名を決め、それと平行して人物をはっきりさせるため姓名を決めさせた。こうして人名が生まれたわけだ。人名といっても一度に決めて役所に登録させたのではなく、初めは支配層である貴族とか地方長官クラスなど上層階級だけだった。それが次第に庶民にまで広げられていったらしい。さてそこでつけくわえられておきたいんだが、一口に名前といっても、氏名とか姓名、名字、苗字といったいろいろな表現がある。現在ではこれらはみな同じものとされているが、当初は、氏は家の系統を表わすもの、姓は朝廷が臣下と与えるあだ名、いわゆる身分に応じた姓

(6ページ下段へ)



## 帝王切開の地・飯能

高橋 通

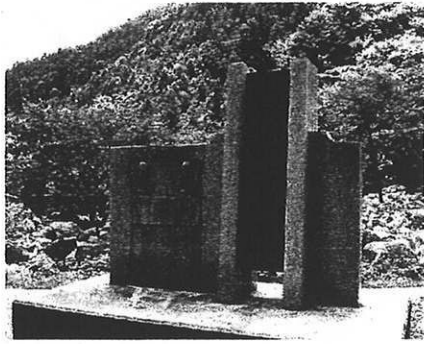
関東平野の西のはずれにある歴史の古い地方都市・飯能の山の中、正丸トンネル周辺の国道脇に「本邦帝王切開の地」の石碑がある。昭和六十二年、当時の産婦人科医、歴史学者、飯能の有志の努力によって建立されたものである。

## 郷土はんのう

嘉永五年四月二十五日（一八五二年六月十二日）、武州南川村の岡部均平と秩父伊古田村の伊古田純道の二人の医師によって患者本橋み登の命を救うために日本最初の帝王切開術が行われた。日本の記念すべき最初の手術がこんな山中で行われたことは驚愕に値するが、よく調べてみると相応の理由があることが分かる。

岡部均平は伊古田純道の甥に当たり、二人とも名声の高かった比企郡番匠村の小室元長、元定父子の下で医学を学んだ。均平は早くから父の後を継いで医学を行っていた。難しい患者については叔父純道の意見を頼りにして診療に当たっていた。嘉永五年、均平は難産に遭遇した。胎児は大き過ぎてなかなか分娩出来ず、ついに子宮内で死亡、産婦はだんだん衰弱してきた。当時一般に行われていた方法で死児の娩出を試みたが成功せず、均平は純道を招いて相談し、以前読んだことのある西洋医学

の本に書かれていた開腹手術による死児の娩出を行うことにした。彼等は患者の家族に、日本ではまだ誰もやったことのない難しい手術であること、他に産婦を救う方法のないことなどを説明し、同意を得た上で手術にとりかかった。インフォームドコンセント（説明と同意）である。手術は困難を極めた。麻酔もせずにおこなわれた手術に患者はよく耐えた。術後も合併症に悩まされ、数十日にして漸く危機を脱した。患者み登はこの手術の後も八十九才の長寿を全うした。この手術は伊古田純道によって「子宮截開術実記」として記録された。大正四年になって、順天堂の佐藤恒二によって発見紹介され、知られることになった。



帝王切開術は、産婦の子宮を切り開いて胎児を取り出す方法であるが、世界で最初に行われたのは、伝説を別にすれば、十四世紀にドイツで行われたものあるいは一五四〇年にイ

タリアで行われている。十九世紀になるまで母胎のほとんどが大量出血や術後の感染によって二十五日以内に死亡した。消毒法などの感染に対する予防と治療法の欠如、麻酔法、手術器具、針糸などの全てが未発達であり、母胎死亡が減少するのはこれらが改善された十九世紀後半になってからに過ぎない。

日本の医学史をみると、山脇東洋による人体解剖の記録「臓誌」は一七五〇年、杉田玄白らによる「解体新書」は一七七四年である。日本最初の帝王切開術は西洋医学書の翻訳から僅か七十八年しか経過していない時期の出来事であった。このような先進的な出来事が、何故飯能の山中で行われたか考えてみたい。

飯能は江戸から意外に近いところにある。当時は黒船来航などのいろいろな事件で攘夷の風潮が高まっていた。一方、西洋からの知識は急速に広がりはじめていた。攘夷や洋学排斥の中で、蘭学者は江戸を離れざるを得なかった。飯能は西洋医学が残留できる格好の地であったよう

だ。その上で、均平の人格、医業ばかりでなく流筏事件や植林などで村民からの信頼が篤かったこと、良き先輩で相談役であった叔父・純道の存在が本邦初の帝王切開術の地となった大きな理由であろう。

飯能市は日本に誇れるこの偉業を記念した石碑を文化財として指定。本心に喜ばしい事である。石碑の

(5ページより)  
 (かばね)だったし、名字は自分で付けた名という意味があった。

▽:へえーそうだったの。で、氏名は一旦決めたら変えられないものだったの。

▽:名は変えられたが、姓は朝廷から下されるものであり、勝手に変えることはできなかった。しかし貴族社会から武家社会への移行にしたがって氏名制度も幾度かの変遷を経て平安末期から中世に至り、武士たちは移りすんだ地名をもって自分の姓にする風潮が広まっていったようだ。鎌倉時代の代表的な武将として勇名を馳せた秩父平氏の流れをくむ畠山重忠も埼玉西部の畠山庄に住んでその地名を姓としたし、源氏の武将基礎義仲は木曾に住んで地名を名乗った。時代が下がるが、同じく源氏の足利尊氏も足利に住んでそれを姓とした。というように住んでいる地名をあた名として名乗るようになったんだよ。

▽:それで分かったわ。Aおじさんが初め、飯能の丹党武士の先祖となった秩父五郎経家(つねいえ)は高麗郡内に移り住んで「高麗」氏を名乗り、経家の子供たちも飯能や原市場、名栗などに住んで地名を姓としたと言ったけど、そうした背景があったのね。面白いわね。

▽:面白いといえば平安期になると、羽振りのいい氏を名乗るものが藤原氏系統の羽振りがいい時代は「藤原」が、平家が勢力を張ると平(7ページ下段へ)

建立に尽力された多くのの方々、本橋家、伊古田家、岡部家の方々にも心から感謝を捧げる。

### 草もち

大野悦子

「今日は私の誕生日。自分のために草もちを作ってみよう」と目覚めたときに思っていた。何の変哲もない三月十七日が私の誕生日である。

この家に嫁いできたとき、日の良し悪しを気にする姑が「お彼岸の前の日だからお祝いをするにもまあ良いわ」と言われたのを覚えている。ところが閏年には彼岸の入りの日と重なってしまうのだ。まさに今年は四年に一度の重なる日となっている。

郷土はんのう  
家のまわりをひと回りすれば、萌えそめて間もない柔らかい蓬を摘むのはわけない事だ。しかも、あちこちから驚の音が聞こえてくるというおまけつきである。こんな面倒なこととは姑の仕事と違っていたが、歳を重ねていつの間にか、私も挑戦してみようなどと自然に変わるものだと我ながら感心してしまう。

摘みだての蓬は茹でると見事に鮮やかなグリーンになる。見るからに滋養になりそうである。幼い頃、母がいつも四月十七日の氏子祭の日に、麺板いっぱい草もちを作っては並べていったの思い出す。

この摘み草はたいてい子供たちの仕事であった。三月三日のお雛さまには、蓬が小さくて摘むのが大変だった。お彼岸から四月八日のお釈迦さまの花祭りまでが、蓬の香りと柔らかなさが一番美味しい。五月のお節句になると摘むのは楽だが香りがつき過ぎるようだ。今は一番よい時季に摘んで冷凍にして置けばいつでも作れるようだ。

悪戦苦闘しながらも、なんとかお昼までには餡入り十五個と餡なし少々が出来上がった。この餡も、まだ料理の計量などなかったところに、姑は餡に入れる砂糖は計ってつくっていた。五合の小豆に二百匁の砂糖を入れるといい具合の甘味になると言う。これをグラム計算してみたら一合の小豆に砂糖百五十グラムとなる。これならいちいち舌に頼った味見をしなくてもいいことになる。

自分で張り切って作って見ると、なんともいとおしく、お皿に並んだ緑が一層美しく見える。早速、仏様にお供えしたが、きつと姑がびっくりしていることだろう。

夫は二月に孫と娘三人一緒の華々しい誕生会をしたせいとか、いつの間にか食卓の上にはぽんとケーキの包みが載っていた。



### 私の家の橋

浅見初枝

虎秀の私の家の前には小さな川が流れており、道路から家に入るまには、橋を渡らなければならぬ。隣近所も同じ地形なので、皆個々で橋を掛けていた。橋の架設費用も相当なものとなるので、共同で橋を掛けたら良いと思うが、山合いの狭い土地なので取付道などの問題で難しいようだ。

昔は土橋で(土橋とは、土台に腐らないという栗の太い芯材を向こう岸からこちら岸まで三本渡し、その上にそろばん木という横木、杉の皮をびっしり敷き詰め、さらに土を盛って造った橋だという)、昔夫の妹が遊んでいて、橋の上でよろけ、橋から落ちたが半纏の紐が橋の止め金に引っかかって運良く助かったことがあるそうだ。橋から川までの高さは三、四メートル、姑はこの話が出る時「まったく、今思い出してもゾッとす。落ちた!と思ったからね」と続けて夫がいった。

「僕達が子供の頃には、山にそり橋が掛かっていて、場所によっては高さが十メートル以上もあったんじゃないかな。そこを這ったりしがみついていたりして遊んだからあれこそ危なかったよ」  
「昔は、今から比べると危険だと

(6ページより)

氏系が、増えていったということもある。源氏が力を得ると源氏系というように羽振りのよい氏を姓とする風潮も広まっていった。寄らば大樹というわけだが、そうした傾向、現代にも通じるから面白い。(能坂利雄著「姓氏の知識」新人物往来社刊『歴史読本日本の姓氏総覧』)ところが江戸時代になると姓名は勝手に変えられなくなってしまう。

▽：貴族や武士階級といった上流階級の姓名はそうした移り変わりがあつたのだろうけど、一般平民の氏名はどうだったの。

▼：庶民のあいだでも鎌倉時代から室町にかけて武士にならって名前に勝手に名字を付けるようになってきた。ところが江戸時代になると庶民は原則的に姓を名乗ることを禁じられてしまった。明治以降は逆に姓を付けることが強制され、結婚や養子縁組などのほかは原則的に変えられなくなった。さらに名前は厳格に変えられなくなり現在に至っている。氏名一つにもこうした歴史があつたわけだ。

▽：Aおじさんありがとう。(文責・吉田靖)

### 飯能郷土史研究会

会員募集集中

申し込みは事務局まで

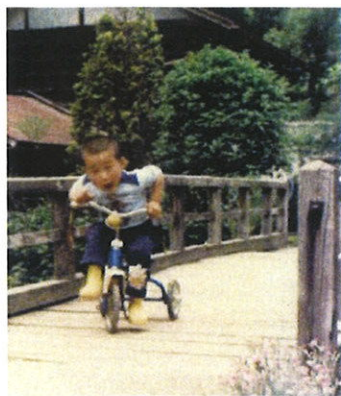


思われることが多くあったけれど、皆ケガもせず大きくなったものだ」と言って姑は溜め息をついた。

そして時代が移って土橋は木橋になり、手摺りも付けられた。三十数年前、私が嫁にきた時はすでにこの形状であった。木橋も古くなると節穴が抜けたり、木の端が薄くなると隙間が広がってくる。毎日通っている家の者は何も感じないが、町から来られたお客さんは、橋が落ちそうで怖くそろそろと歩いたと聞いた。

そこで、橋の上に鉄板を敷いて暫くの間使っていたが、十年ほど前に後手が掛からないようにと、鉄筋コンクリート造りで、手摺りはステンレスを使用した永久橋にした。

この橋の上に西川材のベンチを置き、春には桜の花や川の魚を眺め、の夏にはホタル見物でビールを楽しみ、秋には紅葉を眺めながら姑が近所のおばさんとおしゃべりをし、冬には土寒さに耐えて咲くロウ梅の見事さに感嘆する。個人としてはお金のかかる橋であるが、橋のある暮らしにはこんな風雅さがある。



### 飯能郷土史研究会の活動

◎ 平成十六年度事業報告

▽総会 四月十八日(土)

講演会「中世武士団と中山氏」

講師 田中 懐氏

日本石仏協会理事

▽例会

○六月二十六日(土)

「飯能の歴史」出版まで

講師 吉田 靖氏(副会長)

○八月二十二日(土)

「帝王切開術発祥の地・飯能」

講師 高橋 通氏(会員)

産婦人科医師

▼郷土館特別展関連事業

歴史講座参加

「筏流しの歴史と西川材」

○十一月七日

「入間川の筏流しの歴史」

講師 加藤衛紘氏

筑波大学助教授

○十一月十四日

「各地の筏流し―荒川を中心に」

講師 小林 茂氏

埼玉民俗の会会長

○十一月二十八日

「暮らしの中にもっと木を―西川材の試み―」

講師 吉野 勲氏

建築家

○十二月十八日(土)

大河原亀文「春すいもの草」

―道中記を中心として―

講師 中里和夫氏(会員)

田島 保氏

古文書研究会員

○二月十二日(土)

「飯能のクモ」

講師 嶋田順一氏

日本蜘蛛学会会員

◎ 平成十七年度事業計画

▽総会 四月二十四日(日)

講演会 『飯能のみんよう』

講師 石井英子氏(会員)

「みんなよう」ネットワーク飯能代表

▽例会

○六月二十五日(土)

「飯能のお菓子」

講師 加藤栄子氏

○八月二十日(土)

「名栗を知ろう」

講師 未定

○十月 郷土館事業協賛

○十二月十七日(土)

「飯能・名栗の石仏」

講師 坂口和子氏

○二月十八日

「飯能の織物」

―木綿を中心に―

講師 松本英男氏

◎ 新入会員

嶋田順一(飯能市岩沢)

関根貴志(坂戸市仲町)

よろしくお願いいたします。

### 表紙の写真

下名栗獅子舞

(下名栗諏訪神社獅子舞保存会)

下名栗諏訪神社の獅子舞は、八月二十五日に最も近い土曜日・日曜日に開催される同神社の例大祭に奉納される三匹獅子舞です。今から二百年ほど前に、隣村の青梅市上成木から伝えられ、現在まで休むことなく承継されてきました。一九八七年(昭和六十二年)には埼玉県の無形民俗文化財に指定されています。

郷土はんのう

第二十五号

発行日

平成十七年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

(〒三五七〇一〇二二)

飯能市中藤上郷四一三

岸道生(破草鞋堂)方

電話九七七一〇六五四

編集 岸道生

題字 大野邦弘